

中論 観有無品第十五の一考察

佐藤悦成

一

第二偈に於ける *Na sanbhavah svabhāvasya yuktah pratyaya-heubhi* という命題は、「自性は、因や縁により発生する」を否定して置かれたものである。その否定を成立させる為の論証は、自性と因・縁による発生という概念内容を分析し、そこには矛盾が有り、それ等の結合は否定される、ということを示すにより成立するのである。

ここに於いて、最初に示される否定命題は、行き着く帰結を先に出しているものであるといえる。又、批判される側の考え方は、批判する側の主張から否定の語を除いた形であると思えばよい。

何物かが因や縁によつて発生するというのは、発生したものであるということであり、又、限定されたものになるということである。ここに *bhā*「なる」の表現が重要な意味を持つてくる。自性は因や縁により発生する、ということを用いる為には、自性は限定されたものになることが可能でなくてはならない。しかし、自性という概念の中には、他により限定されない、という意味を含んでいる。又、第二偈に於ける *akritima* は「*kṛitaka* が「已に作された」を意味するのに対し、「作せられることはない」を意味している。それは、*kṛitaka* を否定形にした *akṛitaka* であれば「未だ作せられない」

という意味であるが、*akritima* には「常に作せられることのない」という意味が考えられるからである。これ等の意味の区別により、自性は常に限定されることのない、という意味をそれ自身持ち、限定されたものになるのは不可能である、という論証が成立するのである。

又、自性は他に相待しない、といわれるが、同じく第二偈の *niḥ-apēkṣa*（不相待）の語は、語基の *apekṣa* が「依る・待つ」と訳されることによつたものである。自性は「それ自身にて存在するもの」という、その語が示すように、それ自身の内に存在の原因を持ち、自身の存在の為に他のものを待つことや、他のものに依る必要のないものである。「他に相待しない」というのは、自性に関しての最も根本的な概念であり、それにより先に述べた如く、非限定性と自己存在性を持つのである。そして、この点を根拠として、自性は作せられたものとは言えないから、自性と因・縁による発生・結合は否定され、冒頭の「自性が因や縁により発生するというのは妥当でない」という否定命題が成立するのである。

この論証が何を意味しているかであるが、それは第三偈の前半に *Kutah svabhāvasya abhāva prabhāvo bhaviṣyati* と述べられ、これが次の問題の前提といえるものである。しかし、第一・二偈では自性の有無ではなく、その因縁による発生の否定が問題となつてゐる。そこで、第三偈で「自性は有らず」という命題が導き出されてくることに先の論証の意味があるのである。

それは、自性の因縁による発生の否定から導き出して、自性の存在そのものを否定することである。相手側の立場を批判する為に、敢えて自性の存在を仮定しているが、竜樹の根本的問題は、自性を

否定することにあるのである。

そこで、第五偈までを内容上から一区切りとして、そこ迄の大意は、「自性の仮定により成立している有無の立場は、存在に因縁の概念が与えられた時、その成立は困難となる。なぜなら、それを成立させる為には自性を否定しなくてはならず、又、それを否定すれば有無の観念は成立しない」というものである。つまり、自性を引き離された存在は、もはや存在とはいえず、非存在も成立しない、というのである。しかし、そこには、存在でも非存在でもなければ、現実のこの世界は何であるのか、という問題が残される。が、ここではそれは残された問題となっており、その結論を導く為に有無の観念を批判すること、それが有無品の問題となつているのである。

次に、第七偈以下に、存在・非存在を立場とすれば、常・断見に堕ち入る、という批判が現われるが、その帰結となるのが第六偈である。それは同偈の最後に *tattvān buddhasāsana* の語が見られることから知れる。それは、存在・非存在（有・無）について、これ等は否定されるべきであり、それが真実なる仏説の内容であると示すのである。又、それを第十偈に於いては「賢者はその二見によらない」と述べる。

そこで、有と無により何故に常断の見を生じるかが、第十一偈に述べられる。それは「自性のある存在は無になることはなく、それは常住。又、今は無く嘗て有つたとするならば、それを断滅というのである」として、これにより有無の考えは真実ではないとする。ここに於て批判を終り、先に述べた第六偈へ帰るのである。

二

この章では、存在から自性を否定し、有無の立場を批判すること

に全て費しているが、その否定には二つの方法が用いられている。第一は、縁生を根拠として直接自性を否定する方法。それは「縁により生じた物に自性はない」という形で表わされる。第二は、論証により自性ありとする考えの不成立を述べ、第一の立場へと導く方法である。これは次のような形で展開されている。

ある存在の存在性を決定しているのは自性であるから、存在が非存在となる為には、自性を失わねばならず、自性が無ければ存在でも非存在でもないことになる。ある存在が、それ自身の性質を失う時に「無」の概念が生じるのである。又、変化とは、他の存在になることで、この意味の変化は必ず本質の変化をいうのである。ある本質が自分自身でなくなる時、その本質により有つた存在は非存在になるのである。しかし、本質とは常に同一で変化することはない。ということとは、この立場に於ける非存在とは、存在の断滅を意味するといえる。非存在とは、以前には本質により存在していた、ということがいえねば成立しない概念である。そこで有と無を結び付けるのが変化なのである。その変化が成立しない場合には、有と無の間は全く中断される。自性を立てて、存在と非存在を成立させようとする立場では、存在は常住であり、また突然に断滅すると見るのである。そこでは、常住と中断とが世界の実相となつてしまうのである。これを批判し、*pratyasamutpada* により常と断は成立せずという立場に、全ての存在の実相を求めるのが竜樹の立場である。そこへは自性の否定により導かれるのであるが、その時に全ての存在がどのような姿を持つのか、その点が次に問題となるのである。しかし、それは先に述べた如く、なお残された問題であり、他の章の考察により明らかにされるべき問題なのである。 註略 以上